

Nippon Bauhaus Society  
**Bauhaus**  
Bauhaus magazine

タウトが熱海に残した小宇宙  
～ 旧日向家熱海別邸 ～

熱海ブルーノ・タウト連盟会長  
矢崎 英夫

2022年5月26日に催された日本バウハウス協会主催の渡邊大志氏のZOOM講座を拝聴した。

シナスタジア・シーナリー（共感覚の風景）というテーマでも興味深く受講した。紹介されていた「ひとつなぎの建築」の本をネットにて注文、この本の帯には「互いに自立しながら、全体として緩やかに共存する建築・デザインの未来を探る。」の一文が書かれていた。①

JR熱海駅前の丘の上の東山（現春日町）には、ドイツヴァイマル共和国時代に活躍したブルーノ・タウトが日本滞在中



②熱海東山（現春日町）全景

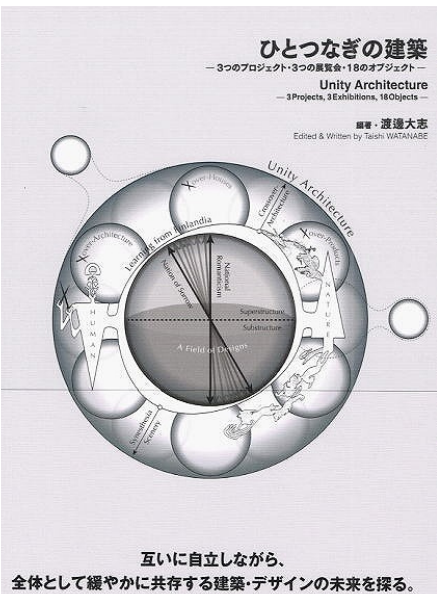
(1933~1936) に設計した、日本で唯一の現存施設が相模湾に向かって佇んでいる。国重要文化財「旧日向家熱海別邸」(1936) である。

この施設、令和元年から総工事費3億円をかけ漏水や耐震の為に工事が行われ、令和4年9月に完成し、今年の4月に予定通り再公開されるはずであった。しかし、昨年7月3日、日本を震撼させた「伊豆山の土石流」の発生により夏に延期と報道されたままになっていたが、2022年8月27日再公開が決定された。②

この旧日向家熱海別邸は、アジア貿易商を営んでいた日向利兵衛により1933年

から1936年にかけて建築家の渡辺仁とブルーノ・タウトが設計した別荘。面積は約100坪程で3期に渡って造られた。当時の熱海は丹那トンネルの開通（1934）でにぎわい、活気があり隣接の東山荘、吉田五十八による杵屋六左衛門旧邸などが建てられた。③

ブルーノ・タウトにより設計された旧日向家熱海別邸の地下室は、「ひとつなぎの建築」の帯に書かれた「互いに自立しながら、全体として緩やかに共存する建築」ではないかと思われる施設である。タウトがこの旧日向家熱海別邸にたどりつくまでの過程をご紹介していきたい。



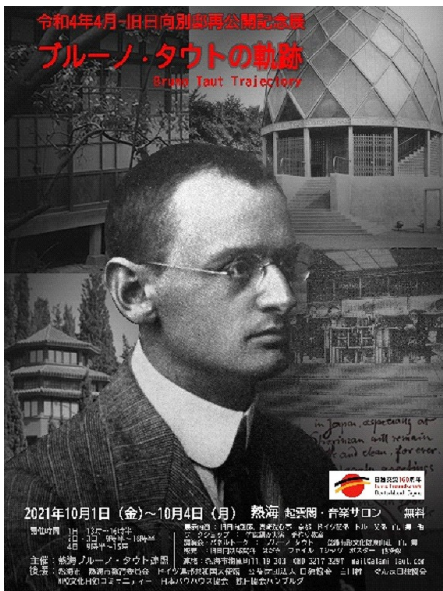
互いに自立しながら、全体として緩やかに共存する建築・デザインの未来を探る。

①ひとつなぎの建築



③旧日向家熱海別邸





④ブルーノ タウトの軌跡展

昨年2021年は、ブルーノタウト生誕140周年、日独交流160周年という記念の年で、タウト自邸のあるダーレビッツでは「ブルーノ タウト展」が開催され、ドイツ連邦共和国大使館においても大々的な記念行事が開催された。また当会・熱海ブルーノ・タウト連盟でも大使館や公益財団法人日独協会などの後援を頂きささやかながら旧日向家熱海別邸の再公開に合わせての記念展「ブルーノ タウトの軌跡展」を10月1日から4日間、熱海市指定有形文化財「起雲閣」にて開催した。④ブルーノ タウトは、ドイツヴェルクブンドでグロピウスと交流し、1920年にはヴァイマルのバウハウスにて「ガラスの家」の講演を行うなどしているが、バウハウスとは一定の線を引いていた。とはいえ多くを共感していた。それは滞日中に高崎の少林寺達磨寺にて計画した「タウト学校案」にみることができる。ブルーノ タウトは、1880年哲学者カントを生んだ東プロイセンのケーニヒスベルク（現在ロシア領カリニングラード）で誕生した。生地の建築学校を卒業し修業後、ベルリンに設計事務所を開設した。35歳に国際建築博覧会で「鉄の記念塔」を発表し、36歳にはケルンのドイツヴェルクブンド展で「ガラスの家」を発表し、一躍有名となり表現主義の代表的存在となった。



⑥白川郷・旧遠山家（タウト視察）

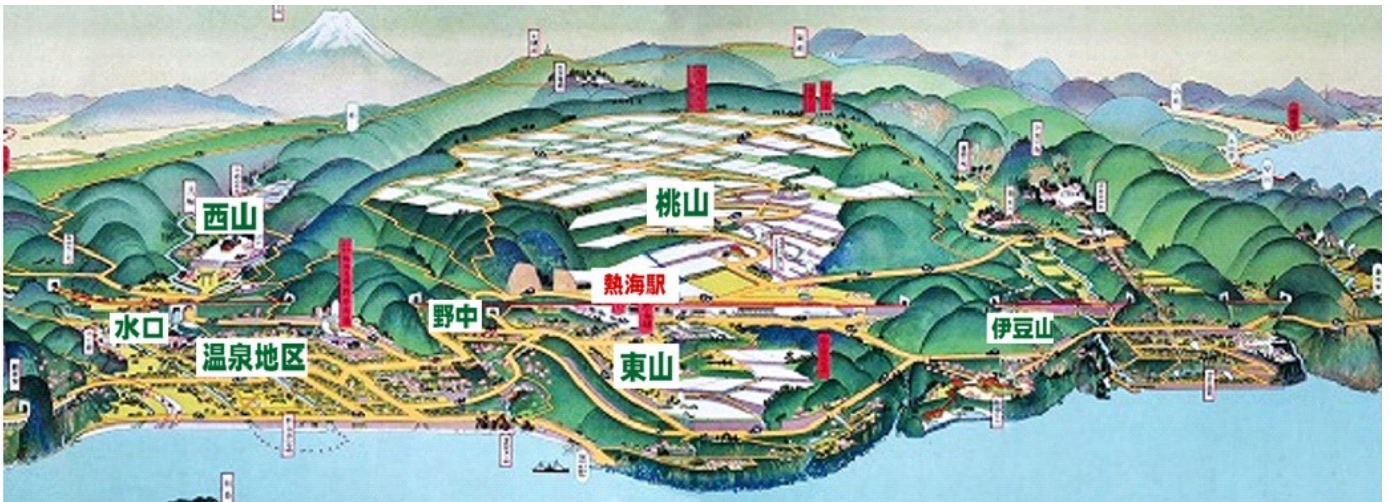
色彩をもっと意識し活用すべきと「色彩宣言」をおこない都市を華やかにした。46歳には1万2000戸にのぼる集合住宅・ジードルングを設計し、多くの労働者に快適な住環境を提供した。2008年には内4施設がユネスコの世界文化遺産に登録された。ナチスの台頭は、社会主義者のタウトを脅かせ、1933年ナチスを逃れるようにエリカを伴い日本国際ナショナル建築会の上野伊三郎の招待に応じ来日した。⑤敦賀港に入り、京都の桂離宮を訪れたタウトは、鋭い審美眼で日本の建築と美術を学び理解し、仙台、高崎で工芸を指導、タウトの弟子である三原徳言氏と共に地元の工芸技術を振興した。そして製作されたタウトの工芸品、照明器具等は「銀座ミラティス」で販売された。そこで行燈照明を購入した日向利兵衛とその後縁をもち、熱海に旧日向別邸地下室を完成させている。3年5カ月にわたる滞日のあいだ、建築設計の仕事にほとんどつけなかったことから、自らを「建築家の休日」と称し、西欧では建築設計が多忙で行うことのなかった工芸のデザインや指導を行い、多くの職人を育成し多くの作品を残した。また一方、日本文化の探求にいそしみ、日本文化の素晴らしさや美しさを著作して全世界へと紹介した。「日本美の再発見」は世代を超え、日本

を超え世界で未だに読まれている名著である。その中で紹介された飛騨の「白川郷」は、地域、その生活に順応した建築・合掌造り、生活の姿が評価され1995年世界文化遺産として登録されている。「結・ゆい」の共同体は現代社会への一つの啓蒙指針ともなっている。⑥また日本での生活を綴った『ニッポン・タウトの日記』では、来日した翌日の5月4日、53歳の誕生日に桂離宮に案内され感動し、「泣きたくなるほど美しい印象だ」と讚えたことが記されている。その感動は翌年に再度訪れ「画帳桂離宮」を著すこととなった。



⑤1933年日本国際ナショナル建築界（雑誌）





◎竹内同族会社による分譲地販売パンフレット（熱海市立図書館）

ブルーノ・タウトが敦賀に入港した昭和8年（1933）の熱海は、激動の真ただ中であつた。徳川家康のお気に入りの温泉地であつた熱海は、江戸時代においては全国温泉番付で行司役の由緒ある地で、江戸の将軍へ温泉桶を運び献上する「湯汲道中」⑦が行われる程の人気の地ではあつたのだが、交通の便が極めて悪くその移動には大変な苦勞であつた。

1888年大正天皇の熱海御用邸ができ、政財界、文人墨客など多く訪れるなどで「人車鉄道」や「軽便鉄道」が導入されたが、1923年9月1日の関東大震災により鉄道交通は完全に遮断され、1925年の熱海駅開業を待たざるを得なかつた。そんな中、国鉄御殿場線の急勾配と長い距離の解消から、工事中であつた丹那トンネ

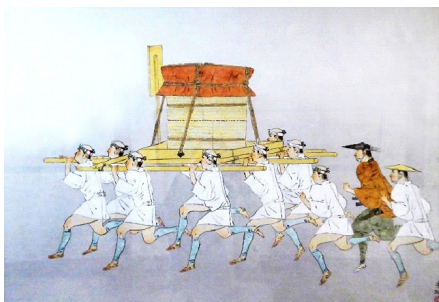
ルが1934年、鉄道史上最難工事を克服して開通した。⑧ 結果、熱海は東西からの来客で賑わつた。丹那トンネル開通を見越し竹内同族会社は、熱海駅に隣接する東山、桃山を「温泉付き文化別荘地」として分譲してゐた。⑨ 旧日向家熱海別邸は1933年に土地を購入し1933年から1936年にかけて造られた施設である。

日向利兵衛は、1933年9月木造二階建ての上屋を銀座和光の設計者である渡辺仁に依頼、続いて屋上庭園を造るための土留めを兼ねた地下室を清水組に依頼し完成させていた。

1935年4月、外交官の柳沢健からブルーノ・タウトの紹介を受けた日向利兵衛は、かつて銀座ミラティスで行燈照明を購入

したこともあり設計を依頼、タウトは受託しその地下室の内装設計を吉田鉄郎の協力を得、棟梁佐々木嘉平により1936年4月に完成させた。その作風は当時の日本の建築界が望んだ「モダニズム」とはまったく掛け離れた、和洋折衷の「摩訶不思議なる地下室」であつた。⑩

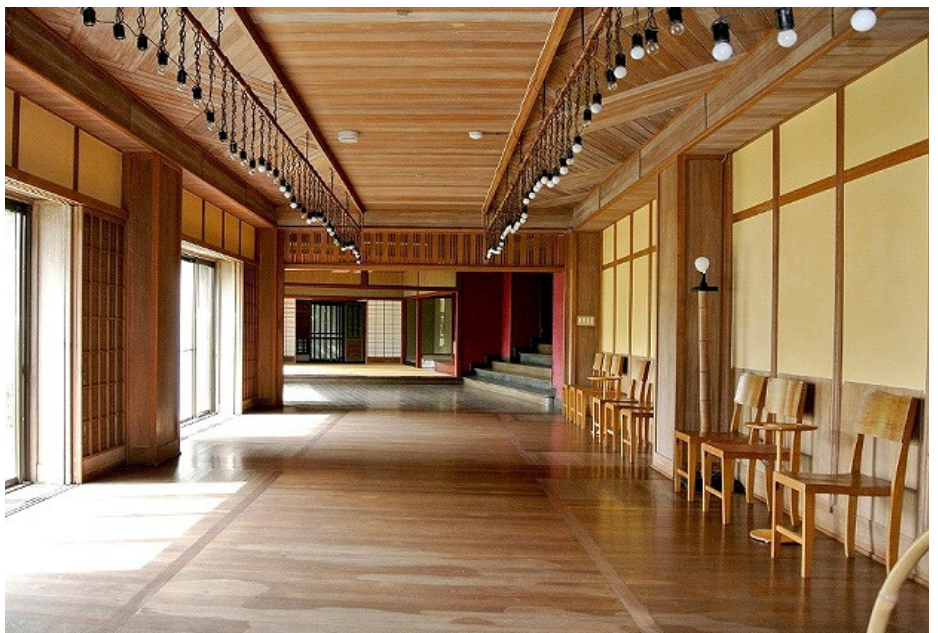
1936年9月20日完成確認に別邸を訪れたタウトは「・・・いま私の仕事が、細部にいたるまで成功しているのを見て、非常に満足した・・・全体として明快厳密で、ピンポン室(或いは舞踏室)、洋風のモダンな居間、日本座敷および日本風のヴェランダを一例に並べた配置は、すぐれた階調を示している。いささか古めかしい言い方をすれば、ベートーヴェン、モーツァルト、バッハだ。私はこの建築を、釣合についてはもとより、細部、材料及



⑦湯汲道中図

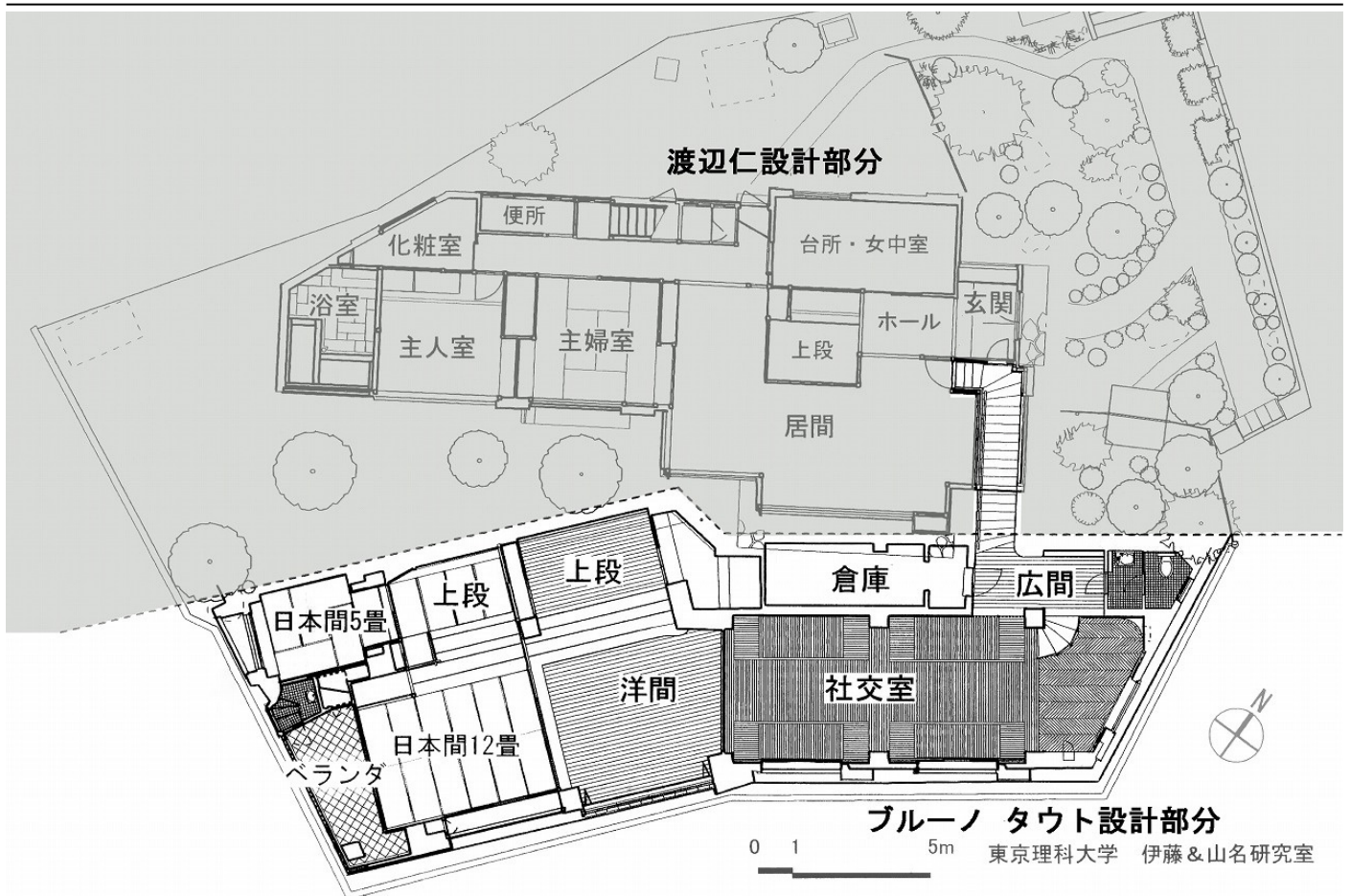


◎丹那トン熱開通（昭和9年）

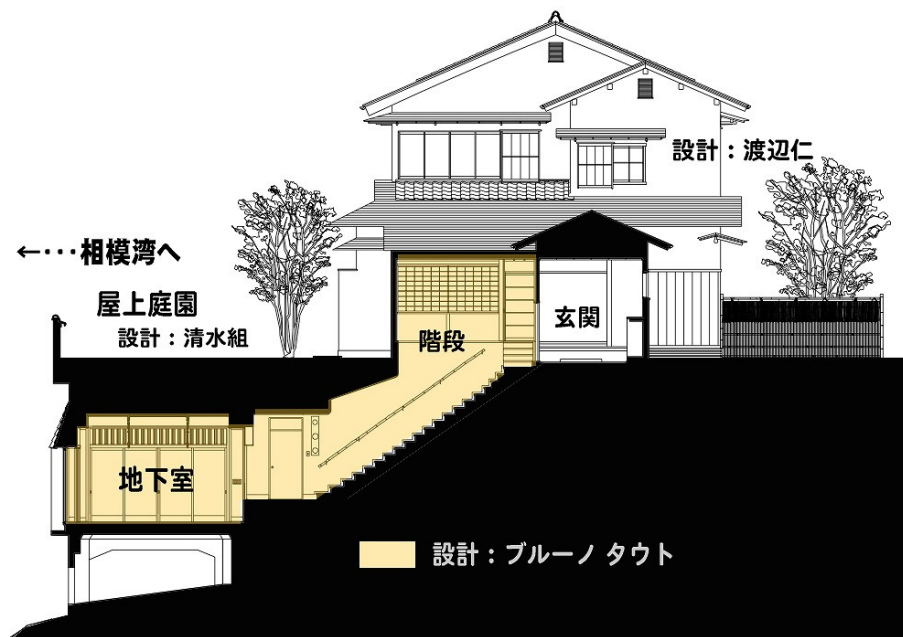


⑩地下室全景（間仕切りなし）





⑩ 旧日向家熱海別邸平面



⑫ 旧日向家熱海別邸断面



⑬ 階段

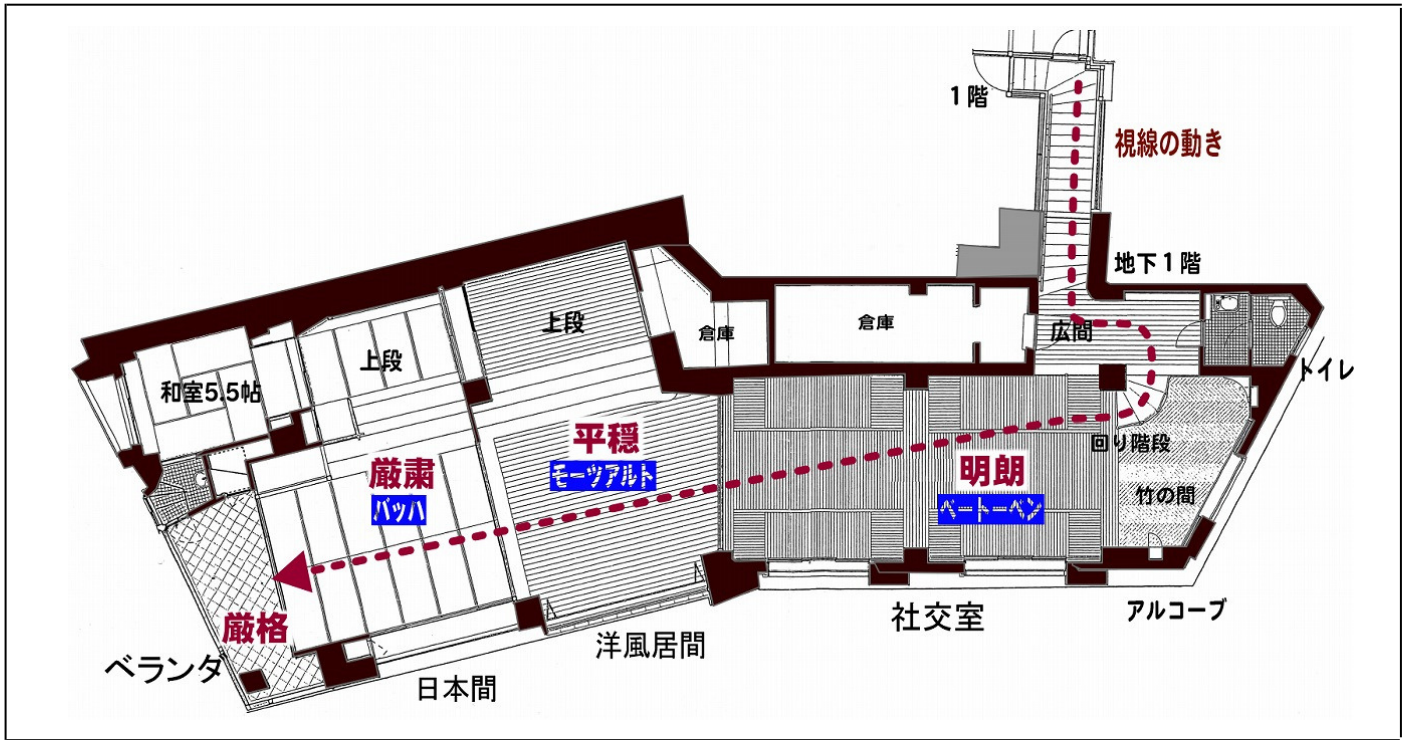
び色彩にいたるまで、成功したと信じている。(・・・)」(篠田英雄訳)と自分の手になる三部屋はドイツ音楽を代表する三巨匠に例え自賛している。タウトは駿河湾を望む傾斜地に建つ横長の130平米ほどの僅かに“く”の字に折れたこの地

⑩平面 ⑫断面

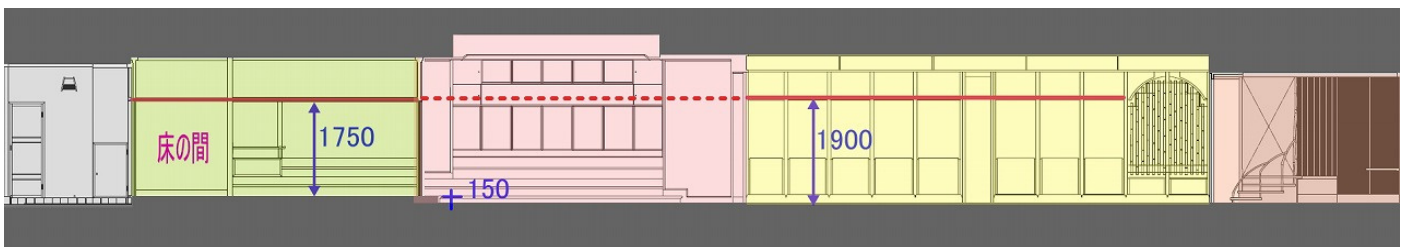
下室を、3つの可動間仕切りで4つの部屋に分け構成している。その区切られた室のデザインは、材料・色彩・天井高など、その多くが異なり自立した個別空間として完結されているそして異なる各部屋とその全体をどう見せるかを単純であるが巧みな動線により処理した。

それは地下室への導入に始まる。1階からの階段を下り、90度回転する小さな階段⑬へと導き、4つの部屋の全体の見える場所へと誘導するというものだ。

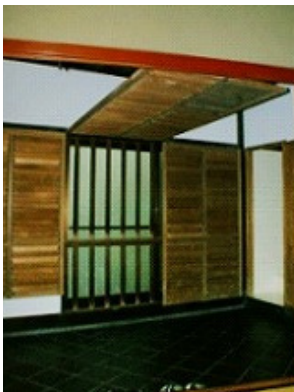




⑭ 平面



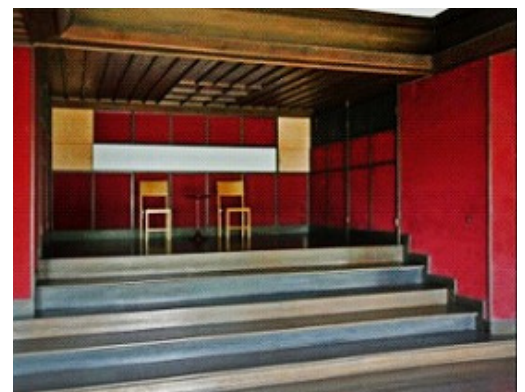
⑮ 展開図



徹格・ベランダ



徹肅・日本間



平穩・洋風居間

タウトは見え隠れする4つの部屋に言葉も添えている。ピンポン室を「明朗」、洋風居間を「平穩」、日本間を「徹肅」、日本風のヴェランダを「徹格」と言った具合に各室の自立性を説いている。



明朗・社交室

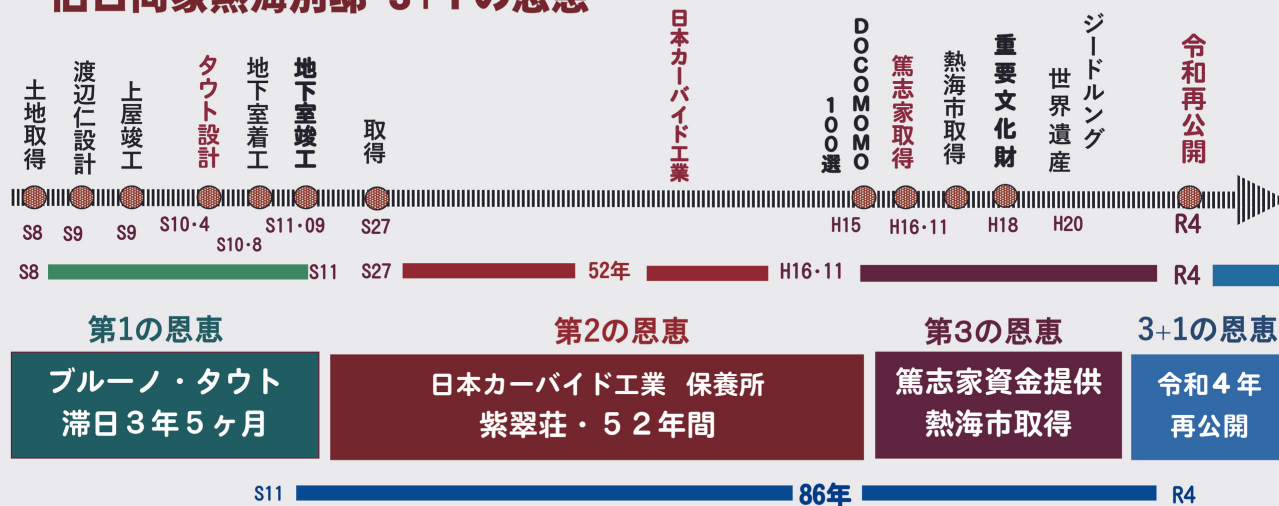


アルコーブ

⑭平面 ⑮展開図 ⑯展開部位写真



## 旧日向家熱海別邸・3+1の恩恵



⑰ 3-1の恩恵の図

タウトはこの自立した4室を全体として穏やかに共存させるために、日本の「内法」を使っている。一般床より150mm上がった日本間の内法を1750mmとし、床の間の落とし掛けも無視して部屋の四方に鴨居を回し、その連続が1900mmとなって洋室、ピンポン室へと続かせて、異なった4室を穏やかに共存する要素としている。

タウトはこれを「諧調」（釣り合い）という言葉で表現した。この諧調には、傾斜地をいかしての段差を活用した大きな階段状の家具（腰掛け）を加えることで、海への多様な視覚が確保され、更に魅力的なものとなっている。

屋上庭園を造るだけの為の土留めの地下室であったが、タウトの手に掛かることにより他に類のない「自立した4つの部屋」となり、日本の「内法」で緩やかに共存され、釣り合いの芸術としての小宇宙を誕生させた。

だが当時の建築界での評判は芳しくなく批判的であった。タウトは「私のこの建築は後50年から100年後に理解されるだろう」という一文を残している。折しも勃発した1936年の2.26事件は不穏な空気で日本を覆った。タウトは「雪は降り積んだままである、少林山の雪景は白と黒の二色だ。ところが東京ではこれに赤が加わって、黒、白、赤の三色となった」と日記に記し、この日から4月1日

まで日記は書かれることがなかった。9月11日トルコより招聘の来信がありタウトは日本の「重苦しい空気はやりきれない」と離日を決意し、旧日向別邸の完成後間もなくの10月15日にトルコへと旅立った。その2年後の1938年12月24日にトルコにて58歳の若さで逝去した。

日向利兵衛亡き後、この別邸は様々な恩恵で維持保存されてきた。熱海ブルーノ・タウト連盟はこれを「3+1の恩恵」と称し広報活動をしている。<sup>⑰</sup>

恩恵の第一は、熱海にタウト唯一の建築遺産を残してくれたこと。第二は日本カーバイド工業により保養所として52年間極めて良好に保存してくれたこと。

第三は、2001年での寸前時、東京在住の篤志家により資金提供がなされ、2004年に熱海市が所有、2006年重要文化財に指定され公開してくれたこと。+1（第四）は、今回漏水、耐震などから2019年5月～2021年9月にかけて3億円の改修工事が挙行され、熱海伊豆山の土石流災害という事態を乗り越え蘇り再公開されることである。

歴史の維持保存には多くの労力と、強い情熱が必要となる。旧日向別邸も同様に多くの人々の思いが集積し現在に至っているが、更にその意思を受け継ぐためには人、都市、国が交流・連携していくことの必要性を感じている。

タウト唯一の現存施設「旧日向家熱海別邸」を預かる熱海市民と致しましては、その発信責務があるのではないかとの思いから「熱海ブルーノ・タウト連盟」を結成した。連盟では広報を積極的に行ないつつ自らが学び、保存と活用、まちの活性化と教育への組み込み等を目指している。また、市民、国民を問わず世界の人々、都市とネットワークした活動を進めていきたい。